

平成30年9月28日

## 若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201780234

氏名 平井 正人

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。  
なお、下記記載の内容については相違ありません。

### 記

1. 派遣先: 都市名 パリ (国名 フランス)
2. 研究課題名 (和文) : オーギュスト・コントの『実証哲学講義』についての研究
3. 派遣期間: 平成29年9月20日 ~ 平成30年9月19日 (3651日間)
4. 受入機関名・部局名: 科学技術史・哲学研究所
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

実証主義の創始者として知られるオーギュスト・コント (Auguste Comte, 1798-1857) は、当代屈指の名門校であった理工科学校 (École polytechnique) に入学するため、1814年10月20日にパリに赴き、1816年4月12日に政治的な理由で学校から追放されるまでの間、理工科学校で科学を学んだ。パリに所在のメゾン・ド・オーギュスト・コント (Maison d'Auguste Comte) のアーカイブにはコントによる当時の講義ノートが保管されている。

具体的には、ルイ・ポワソン (Louis Poinsot, 1777-1859) による解析学講義、アントワーヌ・アンドレ・ルイ・レノー (Antoine André Louis Reynaud, 1771-1844) による解析学講義、オーギュスタン・ルイ・コーシー (Augustin Louis Cauchy, 1789-1857) による無限小計算講義、フランソワ・ジャン・ドミニク・アラゴ (François Jean Dominique Arago, 1786-1853) による解析学の幾何学への応用講義、シメオン・ドゥニ・ポワソン (Siméon Denis Poisson, 1781-1840) による力学講義、アレクシ・テレーズ・プティ (1791-1820) による物理学講義、ルイ・ジャック・テナール (Louis Jacques Thénard, 1777-1857) による化学講義、そして、1817年5月31日から7月26日までパリ天文台 (Observatoire de Paris) でアラゴと、ジョゼフ・ルイ・ゲーリュサック (Joseph Louis Gay-Lussac, 1778-1850) によって行われた天文学講義のノートである。

本プログラム中には、これらのノートを解読し、ワードプロセッサへの転写を行った。転写は2018年1月末に完了し、その後は転写した内容を翻訳する作業を継続している。2018年9月現在、ポワソンとレノーの解析学講義の翻訳は完了し、目下のところプティの物理学講義を翻訳している。年内には物理学講義を完了し、2019年夏までに残りの翻訳も完了する見込みである。

## 6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

2018年12月8日に法政大学で開催予定のオーギュスト・コント国際シンポジウムにおいて、モンペリエ大学のアナスタシオス・ブレナー教授を招いて、フランス語での口頭発表を予定しており、その際に本研究成果の一部を発表する見込みである。2018年12月末までに、博士論文の一章分に相当する論文を執筆し、日本科学史学会の定期刊行物である『科学史研究』に投稿する。また、2019年4月頃に岐阜大学にて開催予定の日本科学史学会年会にて、同論文の内容を口頭発表する。2019年12月に提出する博士論文では、本研究で調査したオーギュスト・コントのマニュスクリプトの内容を分析する。それによって、マニュスクリプトの内容をこれまでの19世紀フランス科学史研究や理工科学校の歴史研究の中に位置づけると同時に、オーギュスト・コントの主著である『実証哲学講義』（*Cours de philosophie positive*）への影響を考察する。また、転写したマニュスクリプトの内容とその翻訳を博士論文の補遺とするほか、その補遺を『科学史研究』などの国内外の学術誌に「史料」として投稿する可能性も検討している。

本プログラム中はマニュスクリプトの解読に専念したが、今後は研究を二つの方向にシフトしていくつもりである。第一に、マニュスクリプトの歴史的背景を調査することである。1795年にフランス革命の産物として誕生した理工科学校は、1804年のナポレオン戴冠、1815年のブルボン復古王政、1830年の七月王政といった度重なる政治変動に伴って、その組織体制を変革させてきた。理工科学校の歴史を研究したブリュノ・ベロストは、そのカリキュラムを三つに時代に分ける。(1) モンジュの学校(1794-1816)、(2) ラプラスの学校(1816-1850)、(3) ル＝ヴェリエの学校(1850-1870)である。こうした変遷の中で、コントのマニュスクリプトはどのように理解できるだろうか。また、コント以外の人物が残した理工科学校での講義ノートもフランス各地のアーカイブに点在している。現存するマニュスクリプトを可能な限りすべて調査することで、理工科学校で教えられた科学の歴史的変遷を明らかにすることができるだろう。第二に、理工科学校での学習をオーギュスト・コントの思想的展開の中に位置づけることである。彼の主著である『実証哲学講義』は数学、天文学、物理学、化学、生物学、社会学に関する講義で構成されているが、その数学、物理学、化学に関しては、理工科学校時代にコントが学んだ科学の特徴が色濃く反映されていることがわかってきた。すなわち、科学史家のロバート・フォックスが「ラプラス物理学」と名付けたリサーチ・プログラムの特徴である。もちろん、『実証哲学講義』がフーリエへの献辞から始まっているように、コントは決してラプラス・プログラムに賛同していたわけではなかった。にもかかわらず、コントが『実証哲学講義』の中で言及する現象や法則の多くは、ラプラス・プログラムが好んで取り上げたものであるように思われる。だとすれば、『実証哲学講義』は新旧のリサーチ・プログラムの折衷から成り立つ哲学だとは言えないだろうか。今後の研究は、上記二つの方向に展開されるだろう。

## 7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

本プログラムによって、オーギュスト・コントのマニュスクリプト研究に区切りをつけることができただけでなく、研究者として成長する数多くの機会にも恵まれた。例えば、2016年12月に開催されたコント・シンポジウムで知り合ったミシェル・ブルドー氏の誘いにより、第一線で活躍しているコント研究者の一人であるローラン・クローザッド氏が主宰するコント読書会に参加し、研鑽を積むことができた。また、メゾン・ドール・オーギュスト・コントの管理人であるダヴィッド・ラブルール氏の厚意により、そこで開催される様々なカンファレンスに参加したり、オーギュスト・コントのマニュスクリプト以外の史料を調査することができた。そして、ミシェル・ブルドー氏に学び、ベルクソン哲学を主題にパリ第一大学で博士号を取得された小野浩太郎氏が主宰しているベルクソン読書会に参加し、ベルクソンを学ぶ機会を得ることができた。最後に、『科学史研究』へのカンギレム特集のための論文を執筆するため、高等師範学校の所在するジョルジュ・カンギレムのアーカイブの利用を申請したところ、CAPHÉSのナタリー・ケルー氏は快諾してくれ、カンギレムのコントに関する学位論文を調査できた。今回のプログラムを通じて、肉筆を通じて過去の人々から学び、議論を通じて現在の人々から学ぶことで、研究者として一回りも二回りも成長できたと感じている。